帝国の軍人に就職したけど不安しかない件について

UDN

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エルステ帝国の帝国兵に就職してしまった主人公

国家公務員のはずがブラックを通りこしてもはや深淵のような職場で日々死なないように働くワークライフの始まりである

注意：文才なしセンスなし、それでもいい人はどうぞ

目次

報告書1 ―― 1
報告書2 ―― 4
報告書3 ―― 8
報告書4 ―― 12

報告書1

――――国家公務員

この言葉を聞いて各々思うところはあるだろう

国の政治、行事に関り良き方向へと国を導いたり、国民の暮らしをよくするために奔走したり、といった国家に奉仕し国を支えていく感じの職業だ

公務員になるためにはものすごい倍率の競争率を勝ち上がらなければならないが、もし就職できれば給料安定クビになることもほぼない

その辺で就職するよりも高い給料をもらえるのでいい暮らしだってできる

つまり、勝ち組である

しかし、国家公務員になるやつはそんな真面目な人間ばかりではなく、給料福利厚生その他諸々の待遇が目当ての人間だっている

自分もその待遇目当ての一人だ

最初は学校卒業後、普通に就職しようとしていた

同期はみんな騎空士や騎空団に憧れを持つ奴が多くて商業、貿易系の騎空団に入団したり、まだ見ぬお宝を探すと言ってトレジャー系の騎空団に入団したり

中には自分で騎空艇を手に入れるという奴もいて、そしてみんなお空に飛び立っていったのである
自分自身別にロマンを追いかけるような人間ではないし、そこまで興味もなく、惹かれなかったのだ
それよりも自分の求めるものは安定した給料と休みである
なので適当に帝国で就職先を探してたのだがそんな時、ある張り紙を見つけた
内容は公務員募集と書いており、そしてその良すぎる待遇を見てここしかないと思い、定員寸前とのことでその日の内に申し込みに行き、試験を受けた
その結果見事合格
そして俺は公務員になったのだった

懐かしい
あの頃は純粋で、『やったぜこれで勝ち組だオラァ!』とかはしゃいでたなー
帝国兵とかこの帝国では花形の職業だし、実際待遇はいいし最初は文句はなかった
まあ、危険な任務もあるけどそれ以外だと命の危機もないし、帝国付近の魔物は強く

ないから哨戒も楽だしで、結構お金貯まったし旅行行きたいなー

「全く使えないね～。僕はのろまな奴は大嫌いなんだけどな～」

「も、申し訳ありませんフュリアス少将！　今すぐに報告書をやり直しますのでどうか――」

「その言葉は聞き飽きたよ。おい！　こいつを連れていけ！」

「そ、そんな――」

さて、現実逃避はやめよう。同期の一人の命が消えようとしているし

今目の前で少将の部下であろう軍人が連れていかれた

確か同じ年に入隊した同期なのだが、報告書の提出が遅れたのだろう

普通なら一回怒られて済むが、相手が悪かったな

フュリアス少将は物凄く気が短いからその一回で命を落とすなんてよくある光景だ

ミス一つで処刑されるかもしれない職場はここだけだろう

俺はエルステ帝国帝国兵、名前はリヒト＝クレール

帝国軍人になって2年、敵は外部よりも内部の方が多いと学習した俺は不安しかないがとりあえず明日を迎えることを目標にお仕事頑張っています（白目）

報告書２

今になって思えば、普通に騎空団に入団した方がよかったのではないかと思うのだ
命の危機はこの空で暮らしていく上で魔物と敵対するため仕方がない
しかしだ、上司に理不尽に殺されるようなことはないし衣食住あって働いたらお金も貰えるし、完全にホワイトである
あのチビ少将も立派な肩書があるんだからもっと部下に優しくしろよと思う
思うだけである
民衆のど真ん中でたかいたかーいってしてめちゃくちゃ恥ずかしい思いをさせたい
そんなこと言ったり実行すれば即あの世逝きなのでやらない
あいつの部下たちはよくついていけるな
まあついていくと言うよりは死にたくないから従わざるを得ないんだろう
やはりあそこが一番ここではブラックだと昨日死んだ同僚を思い出すのであったとさ

ちなみに俺の所属は防衛部隊という首都の警備、守護が目的の部隊だ

だから基本的にはフュリアス少将の部隊とはあまり会わないので宮殿ですれ違うときに粗相をしなければ問題はない
あるとすれば補充要員として駆り出される時は生きている心地がしない
フュリアス少将のあの短気のせいで部下が死ぬ（処刑される）と部隊人数が減る
そうすると任務に影響がでてしまうので手の空いている人間を一時的に別の部隊から補充するのだが、過去に数回自分もフュリアス少将の部隊に補充要員として入ったことがある
とにかく機嫌を損ねたら死ぬので細心の注意を払いながら一週間務めた
ちょうどその時星晶獣の捕獲任務だったのだが、その任務に失敗したのだ
単純に戦力不足で、しかもその理由が少将のいつもの部下の切り捨てと本人がこのくらい楽勝とか言って他部隊の援軍を断ったのが原因だったのだ
その結果、強大な力をもつ星晶獣にフュリアス少将の部下１００人で挑むことになったのだ
基本的には星晶獣を相手にする場合、３部隊以上で抗戦するのが原則なのだがあのハーヴィンは一切無視、おまけに任務失敗を部下のせいにして俺たちを処刑しようとしていたし
ポンメルン大尉が止めてくれなかったら死んでいた

そんなかんじで、防衛部隊だからといってフュリアス少将と関わりがないわけではない

補充要員の話がこないようにと毎日戦々恐々としている

補充要員として行くなら俺は絶対ポンメルン大尉の部隊がいい

あの人帝国軍人としての誇りを常に持ってて部下にも優しいのだ

大尉の部下に話を聞いたところ、結婚した部下に有給を与えて旅行にでも行ってこいとポケットマネーで旅費を出したり、任務中にけがをした者には気遣いを見せ現地の人間に自ら治療の手助けをするように頼み込んだりするらしい

いい上司じゃないかマジで

あのチビとでは月とすっぽん以上の差がある

俺たちの中ではポンメルン大尉はまさに帝国最後の良心なのだ

「なので少将のところには行きたくないというかなんというか」

「いいから逝ってこい」

目の前には少将のところへの補充要員の承諾書

そして問答無用で逝けという防衛部隊長

俺は五日後、朝日を拝むことができるのだろうか

とりあえずチビは氏ね

報告書３

「第一部隊は右に回れ！　第二部隊、第三部隊は戦線を維持せよ！」
「魔法用意――！　撃てぇ！」
俺の名前はリヒト。エルステ帝国の軍人で防衛部隊の部隊員である。
防衛部隊は基本的にエルステ帝国の首都の防衛が任務で魔物の進行を阻止することがお役目だ。
だから大部隊で動くこともないし、魔法をぶっ放すこともない。
しかし、先程からたくさんの人間の足音、怒号、悲鳴、叫び声、魔法が放たれる轟音といろいろと聞こえてくる。
今俺がどこに居るのかというと、星晶獣討滅作戦に参加しているためにとある島にいるのだ。
ことの始まりは部隊人数の不足による人員補充の知らせを受けたことが始まりだ。
あのチビが無駄で無駄に無駄な犠牲を出すせいで大部隊で実行する星晶獣討滅戦ができなくなるということで各部隊に知らせが来たのだ。その貧乏くじに当たった不運な人間が俺という訳である。

ただ、俺は戦闘するわけではない。
星晶獣に対する戦闘は基本的には魔法戦を主軸に部隊戦を構築するのだ。
攻撃を防ぐナイト系の部隊が相手星晶獣の攻撃を防ぎ、その他の部隊が魔法部隊を護衛する。魔法部隊は星晶獣を直接狙う。大まかに言えばこういう形なのだ。
俺は医術の心得と治療術があるので前線の後ろで負傷兵を治療している。
今回以外でも何度か星晶獣討滅戦に参加したこともあるからわかるのだが、いつもの倍以上に負傷兵が多い。
これがナイト部隊や護衛部隊だけなら各々仕事を全うしているなと思うが、魔法部隊も混ざっているのだ。しかも人数的に差がないのだ。
後ろから遠距離で攻撃する魔法部隊は負傷することはあまりなく、護衛を突破した魔物に襲われるくらいなのだ。
おかしなことであるが、理由はすぐに分かった。

「はは、星晶獣といってもこんなものだよね――！　ほぉらくらえ！」

チビ少将、お前のせいだったか。いやなんとなくわかってたけどさ。
少将は明らかに後衛向きらしい。部隊が展開しているところよりさらに後ろから魔

法で攻撃している。その強さはさすがなもので、あの身長で少将という階級まで登り詰めたのもわかる。

だがそれは強さという部分だけであって、他は畜生以下だった。

少将の撃つ魔法が他の部隊を巻き込んでいるのが負傷兵の多い原因だった。

魔法部隊が攻撃する際には指揮官が合図を送り、部隊ごとに防御を固めたりしてダメージを減らす、星晶獣の動きに合わしてファランクスを撃つなど部隊統制をきちんとしたもとでみんな戦闘しているのだ。

しかし、少将の攻撃は合図とかそういったものは一切なく、放たれれば後は巻き込まれないように祈るしかない。

星晶獣は確かに弱っていっている。だがこちらの人員は有限で、こんな使い方をしていればいつかいなくなるかもしれない。

「た、頼む…。助けてくれ…」

「負傷した兵を運んできた！　頼んだぞ」

「うう…いてぇ…」

次々とやってくる負傷兵を応急処置だが治療していく。一歩間に合わずに命を落と

した兵もいるが、気にしていられないのだ。
同じ帝国軍人だが、昨日今日あった人間に情が移ればこの職業はやってられない。自分の心が先にやられるからだ。
精神的にも肉体的にもやられないように気をつけなければならない。
とりあえず、星晶獣討滅戦はなんとか終わったが、犠牲は多すぎた。
その犠牲はすべて星晶獣のせいになるのだろう。権力を使った隠蔽工作によって。
本当に、この職業について不安しかないのですが、未だにやっていけるか不安です。

報告書４

朝と呼ぶにはまだ早い時間

窓から朝日が差し込む、訳ではなく、まだ朝日が上がる前に目が覚めた

昨日は星晶獣の任務から帰ってきて、死亡した兵士や負傷した兵士についての報告書を書いて、夜ごろに家に帰って死んだように寝たはずだ。なのにいつも通りの、仕事が始まる時間に目が覚めてしまうあたり悲しいというか、自分も帝国軍人なのだな、と改めて認識して、すこし微妙な気持ちになる。

流石の帝国もあんな大掛かりな任務の後には休暇を用意してくれていた。しかも二日である。

正直、任務の疲れが二日で癒されるかと思えばそんなことはないが、まあないよりはマシである。体の疲れは取れても精神的に負担がかかっている奴らの疲れは取れないだろう。

とりあえず、惰眠を貪りたくても目が覚めてしまったので朝食を作ることにしよう。いつもは簡単にすませてしまうが今日明日は時間があるのだし少し凝ったものを作るのも悪くはない、と思うのだ。

朝食を食べて、特にやることもないので町に出かけることにした。

まだ朝なのだが人は結構歩いている。出店が並び果物や野菜などを売っているところで買い物をしている人がいれば、カフェなどで朝食を楽しんでいる人もいる。とても平和だ。星晶獣との戦闘なんてなかったかのようである。

だが、任務のことなんて考えてもしかたがないし、犠牲になった帝国兵のことなんて、知ったことないと、自分の中では割り切っている。

軍人なのだから、死ぬことが普通だ。前線にいることが少ない自分だが、それでも自分の目の前で人は死ぬし、理不尽な上司のせいで死ぬことだってある。というか、その方が見ている割合が多い気がするが、気のせいだと思いたい。

「おお！　お前か！　今日は仕事は休みなのか？」

声をかけてきたのは酒屋の店主だった。仕事を始めてからとてもお世話になっている人だ。愚痴も良く聞いてもらっている。

「まあ、大きな任務があったから今日は休みになったんですよ」
「そうか。俺たちも聞いたよ、星晶獣関連だったんだって？　軍人ってのもやっぱ楽じゃないんだな」
「前線にはいきませんが、結構しんどいとこですね。回復術なかったら今頃死んでるんじゃないですかね？」
「かもな。ま、また飲みたくなったら来いよ！　少しならまけてやる」

そう言って二カッと笑う店主。イケメンおじさんマジかっこいいです。
また近いうちに行こうと思う。最近飲んでないし、潰れるまで飲みたいものだ。そういう気持ちになるときもあるだろうし。
店主と別れて歩いていると、見知った顔がいた。いつものフルフェイスの兜は脱いでいて、鎧も着ていない。
黒い髪で、同期の軍人だ

「ユーリ、なにしてんだ？」

そいつはユーリ、なんだかんだで仲がいい数少ない友人と呼べる人物である。